

令和元年5月31日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K20923

研究課題名(和文) 言語接触論・通言語学的観点から捉えた日本語の形成における漢文訓読の役割の再検討

研究課題名(英文) Reevaluation of the role of kanbun kundoku in the formation of the Japanese language from a contact/cross-linguistic perspective

研究代表者

ジスク マシュー・ヨセフ (Zisk, Matthew Joseph)

山形大学・大学院理工学研究科・助教

研究者番号：70631761

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトの目的は言語接触・通言語学的視点から漢文訓読の性質と特徴を分析することで、日本語の形成における漢文訓読の役割を明らかにすることであった。漢文訓読とは、漢文の一字一字を自言語(=日本語)に直訳していくプロセスであるが、このプロセスを経て、日本語の固有語彙である和語が多大な影響を受けているのである。本プロジェクトでは実際の訓点資料で模倣形式(漢文の語彙や語法を模倣して造られた日本語)を調査していくことで、漢文訓読の影響は、和語の意味と語構成を大きく変貌させていることを明らかにした。そして、通言語学的に見て、漢字の表語性から生まれた漢文訓読特有の模倣形式もあることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの日中言語接触の研究は主に借用語(漢語)と音韻的影響(漢字音)に着目したが、本研究で明らかにしたように、漢文訓読というプロセスを経て、日本語の固有の語彙である和語も漢字・漢文から多大な影響を受けているのである。他言語形式の模倣は言語接触において一般に見られる現象であるが、漢文訓読で見られる模倣形式にはヨーロッパの言語では見られないようなものもあり、これらの形式の発生には漢字という言語接触の媒体が大きく影響していると考えられる。これまでの言語接触研究では接触の媒体があまり重視されない傾向にあったが、本研究の成果により、接触の媒体が借用の在り方を大きく変貌させうることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this project was to reevaluate the role of kanbun kundoku ('vernacular reading of Classical Chinese') in the formation of the Japanese language from both a language contact and a cross-linguistic perspective. Kanbun kundoku is the practice of interpreting a Classical Chinese text character-by-character into the vernacular (in this case, Japanese). Due to its metaphrastic nature, the kanbun kundoku process has heavily influenced the native Japanese vocabulary. In the course of this project, I searched for imitational loans (Japanese words coined after Chinese models) in a number of early Japanese glosses of Classical Chinese texts. Through my survey, I discovered that Classical Chinese has heavily influenced both the semantics and word formation of native vocabulary. I also discovered a number of imitational loan strategies unique to kanbun kundoku. Such strategies could be said to be the byproduct of language contact via a logographic script such as kanji.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 漢文訓読 言語接触 意味借用 翻訳借用 借用派生語 グロス 口訣

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本語における漢字・漢文の影響は莫大なものである。漢字および漢字から派生した平仮名・片仮名からなる日本語の書記体系や漢文から伝った夥しい量の語彙を見れば、その影響は一目瞭然である。しかし、文字や語彙の受容の裏にはもうひとつ、多くの場合では目立たない漢字・漢文の影響がある。すなわち、漢文訓読を通して、日本の固有語彙である和語は意味や語構成等の面において漢字・漢文から歴大な影響を受けているのである。

漢文訓読とは類似した現象として、中世ヨーロッパのラテン語文献における注釈活動が挙げられる。平安時代の漢学者と僧侶が漢文の文章に訓点を付けていったのと同様に、中世ヨーロッパの古典学者と修道士もラテン語の文献に自言語による注釈 (gloss) を付けていった。そして、漢文訓読が日本語の固有語彙の意味や語構成を変貌させたのと同様に、中世ヨーロッパの注釈活動もヨーロッパの言語に大きな影響を与えている。

和語に対する漢文訓読文の影響として、筆者は以前に漢字を媒介とした意味借用を取り上げてきた (ジスク 2009、2010、2012)。そして、ジスク (2015) では漢文訓読の影響は和語に意味にはとどまらず、その語構成プロセスと統語にも大きな影響を及ぼしていることを明らかにした。中世ヨーロッパでも、ラテン語文献の注釈活動 (glossing) を通して、英語とドイツ語が意味および語構成の面において多大な影響を受けていることは Betz (1949)、Gneuss (1955) 等によって明らかにされているが、漢文訓読が及ぼした影響とラテン語文献の注釈活動が及ぼした影響を比べた研究がこれまでになかった。本研究では漢文訓読の影響で生じた様々な借用形式を分析していくことで、これまでに論じられてこなかった言語接触の観点から見た訓読と glossing の根本的な違い、そして漢文訓読の特異性、日本語の形成における漢文訓読の役割の一端を明らかにした。

### 2. 研究の目的

本研究は言語接触論・通言語学的観点から漢文訓読という現象を捉え直すことで、漢文訓読の特徴を示し、また同時に漢文訓読が日本語の形成において果たした役割を明らかにしようとするものである。本研究の目的は次の四点に分けられる。

訓点資料の調査を通して、漢文訓読が日本の固有語彙である和語の意味・語構成、統語等に与えた影響を示す。

漢文訓読とは相似する習慣である中世ヨーロッパのラテン語文献に対する古典注釈 (glossing) とそれがヨーロッパの言語に及ぼした影響を見ていくことで、漢文訓読との違いを明白にし、言語接触論における漢文訓読の位置づけを示す。

今後、漢文訓読と glossing の比較研究を促進するために、訓点資料の用例を英文で引用するために引用形式と、形態素グロス規範を定める。

漢文訓読で生じた借用形式の一般の文章への浸透を調べるために、漢文訓読の影響が大きいと言われている中古・中世の和漢混淆文資料を集めた「中古・中世漢字仮名交じり文コーパス」を作成する。

### 3. 研究の方法

本研究の大まかな流れは次のようにまとめられる。

訓点資料調査 (2016~2017)

古訓点資料から借用形式の例を集め、どのような形式が見られ、またそれぞれの形式がどのような特徴を持つかを分析した。調査資料には西大寺本『金光明最勝王経』を使用し、春日 (1985) の訳文に拠りながら、総本山西大寺編 (2013) の影印本で該当箇所を確認した。

ヨーロッパにおける古典注釈研究者と対談 (2016~2018)

3回にわたってヨーロッパに渡航し、漢文訓読と古典注釈の比較ワークショップで成果発表をするとともに、現地の研究者と、漢文訓読と古典注釈の違いについて対談した。研究方法についての助言をもらうと同時に、comparative glossing (比較古典注釈学) の論文集の編纂を企画した (2018年7月)。

「中古・中世漢字仮名交じり文データベース」の構築 (2016~2018)

2011年から構築を続けてきた「中古・中世漢字仮名交じり文コーパス」に『史記桃源抄』の全文テキストを加えた。底本には亀井孝、水沢利忠 (1965-1973) 『史記桃源抄の研究』(日本学術振興会) を使用し、学生アルバイトを雇用して、入力作業をしてもらった。

英文による訓点資料の用例の引用形式の選定 (2018)

英語の論文で訓点資料からの用例を引用するための glossing rules (グロス規範) を定めた。具体的には全体のフォーマットを決め、また平安時代の日本語の文法形態素のタグをひとつひとつ定めた。訓点語学会で発表する (2018年5月) 他、韓国の口訣学会でも、口訣の例文を入れて発表している (2018年8月)。

### 4. 研究成果

初年度 (2016年度) には日本の訓点資料における借用形式の調査に専念した。具体的には西大寺本『金光明最勝王経』を調査資料とし、全10巻から翻訳借用語 (loan translation) 180

語と借用派生語 (loan derivation) 22 語を採集した。翻訳借用語とは漢字熟語の構成要素をひとつひとつ日本語に直訳した語で、借用派生語とは漢字の用法に倣って造られた派生語である。西大寺本『金光明最勝王経』で見られた翻訳借用語の例として、「光耀」を直訳して造られた動詞の「ひかりかがやく」と「彼岸」を直訳して造られた「かのきし」等が挙げられる。同資料で見られた派生借用語の例として、動詞と接続詞の両方の使い方を持つ「並」を模倣した接続副詞の「ならびに」(「ならば」からの派生語)と、動詞としても連体修飾語として使用される「有」を模倣した連体詞の「ある」(「あり」からの派生語)等が挙げられる。

採集した用例を分析した結果、翻訳借用語の場合は語順まで一対一の直訳が圧倒的に多いが、なかには音調を整えるために熟語の項を逆にしたものや、日本語において同様な概念がないため、一部を意識したものがあることがわかった。借用派生語については派生のパターンは基本的に日本語の形態統語論的法則に従っているが、派生の結果生まれた語はその基の語とは機能的また意味的に大きくかけ離れている場合が多く(例えば、動詞 接続副詞に転じる等)漢字・漢文の直訳であることは誰が見ても明らかであった。本調査の成果は The 24th Japanese / Korean Linguistics Conference で発表し、翌年に同学会の機関紙で論文として公表した。

初年度の後半から漢文訓読の性格をよりよく把握するために、和訓の選定プロセスを調査した。そのために、非常に多くの漢字の訓として用いられている「あかす」と「あらわす」を例に、中国および日本の字書と注釈書におけるその意味記述を調べた。その結果、「あかす」のほとんどの被訓字には「明也」という注が、「あらわす」の被訓字のほとんどには「顕」という注が付記されていることがわかった。「明」「顕」のように字書や注釈書でよく現れ、漢字の訓を決める際に参考となった比較的簡単な字を基準字 (reference character) と呼び、これらの字が和訓を定める際に大きな役割を果たしたことを示した。この成果について日本国内およびドイツの学会で発表した。

翌年度(2017年度)は引き続き、日本の訓点資料の調査に専任し、そのなかでも特に借用義と和訓の選定プロセスについて考察した。借用義の例として「記載される/する」義の「のる」「のせる」の成り立ちを調べ、この意味が漢文訓読において「載」という字の訓として初めて現れ、その後、漢文訓読調の強い文体の資料を経由に一般の文章へと広がったことを証明した。本調査の結果は機関誌『訓点語と訓点資料』で公表した。もうひとつの借用義の例として「遷都する」「左遷する」「配流する」義の「うつる」「うつす」を調べ、これらの意味がいずれも訓点資料において初めて出現することを明らかにした。また、意味借用とは類似した現象として、漢字による意味の混同と、漢字による別語意識の発生を調べた。前者の例として、「まなぶ」と「まねぶ」を取り上げ、これらの語は本来「学習する」(まなぶ)、「模倣する」(まねぶ)のように使い分けられていたが、両方の意味を持つ「学」字の訓として両方の語が定着することで、その意味が混同したことを示した。後者の例として、「なく」という語を取り上げ、「なく」は本来人間・動物を問わず、悲鳴を上げるという意味であったが、人間の場合には「泣」、動物の場合には「鳴」というように書き分けられるようになることで、あたかもふたつの語であるかのように認識されるようになったことを示した。これらの意味借用とは類似した現象についてフランスの国際学会で発表した。意味借用と和訓の選定プロセスについて論文でまとめ、「義から見た漢字」(『日本語ライブラリー漢字』)の一章として刊行した。

最終年度(2018年度)にはプロジェクト期間中の成果をまとめると同時に、日本の訓点資料、韓国の口訣資料、ヨーロッパの古典注釈資料の比較研究を促進するためのグロス規範を定めた。本規範はこれまでに英語による研究がほとんど為されてこなかった訓点資料および口訣資料の用例を英語で記述するためのもので、日本の訓点語学会で発表する他、韓国の口訣学会およびアイルランドで行われた国際ワークショップで発表し、広く好評を博した。

最終年度の12月には2016年度より始めた『史記桃源抄』(全5冊)の電子テキスト化をようやく完了し、現在ネットで全文検索システムをデザインしている。近日中にはJSPS特別研究員奨励費11J07278および科研費25870077の助成金で電子テキスト化した『雑談集』『三国伝記』『毛詩抄』等の資料とともに「中古・中世漢字仮名交じり文コーパス」の形でネット上に一般公開する予定である。

#### 【参考文献】

- Betz, Werner (1949). *Deutsch und Lateinisch: Die Lehnbildungen der Althochdeutschen Benediktinerregel*. Bonn: H. Bouvier u. Co.
- Gneuss, Helmut (1955). *Lehnbildungen und Lehnbedeutungen im Altenglischen*. Berlin / Bielefeld / München: Erich Schidt Verlag.
- 春日政治 (1985)『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』春日和男編『春日政治著作集』別巻、勉誠社
- ジスク マシュー (2009)「和語に対する漢字の影響 「写」字と「うつす」の関係を一例に」『漢字教育研究:「漢検」研究助成報告書』10: 6-45
- ジスク マシュー (2010)「意味の上の漢文訓読語 和語「あらはす」に対する漢字「著」の意味的影響」『訓点語と訓点資料』125: 53-78
- ジスク マシュー (2012)「啓蒙表現における漢字を媒介とした意味借用 和語「あかす」の意味変化過程における「明」字の影響」『国語文字史の研究』13: 105-126
- ジスク マシュー (2015)「漢字・漢文を媒介とした言語借用形式の分類と借用要因」斎藤倫明・

石井正彦編『日本語語彙へのアプローチ 形態・統語・計量・歴史・対照』おうふう, pp. 197-213  
総本山西大寺編(2013)『国宝西大寺本金光明最勝王経天平宝字六年百濟豊虫願経』勉誠出版

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計7件)

ジスク マシュー(2019 印刷中)「字義の和化と和製の字義 借用形式の観点から」『日本語学』2019年7月号, ページ番号未定(査読なし)(掲載決定)

ジスク マシュー(2019)「電子テキストを利用する」大木一夫編『ガイドブック日本語史調査法』第11章, pp. 233-260. ひつじ書房(査読なし)

ジスク マシュー(2019)「用例を集める」大木一夫編『ガイドブック日本語史調査法』第10章, pp. 211-232. ひつじ書房(査読なし)

ジスク マシュー(2017)「義から見た漢字」沖森卓也, 笹原宏之編『日本語ライブラリー漢字』第4章, pp. 73-96, 朝倉書店(査読なし)

ジスク マシュー(2017)「和語の書記行為表現「のる」「のす」の成立をめぐって 漢字を媒介とした意味借用の観点から」『訓点語と訓点資料』139: 28-52(査読あり)

ジスク マシュー(2017)『日本語大事典』の項目名を英訳して その作業過程と諸問題点』『日本近代語研究』6: 39-57(査読あり)

Zisk, Matthew. 2017. Middle Chinese Loan Translations and Derivations in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 24: 315-329. (査読あり)

[学会発表](計13件)

Zisk, Matthew. 2018.03. How We Can Use Historical Linguistics to Make Language Learning More Interesting. Paper presented at the International Association of Japanese Studies 321st Meeting, Yamagata City, Japan.

ジスク マシュー(2018.12)「西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点に見える中古漢語の模倣形式 借用転成と借用統語を中心に」第3回日本語と近隣言語における文法化ワークショップ(GJNL-3), 於東北大学

Zisk, Matthew. 2018.08.

[Methods for English Transcription of Kundoku and Gugyeol Texts]. Paper presented at the 55th Conference for Gugyeol Studies, Jeju, Korea. (査読あり)\*

Zisk, Matthew. 2018.07. Glossing Glosses: A Look at Contemporary Glossing Methods of Kundoku Texts and a Proposal for a Universal Standard. Paper presented at Glossing cultural change: Comparative perspectives on manuscript annotation, c. 600-1200 CE, NUI Galway, Ireland. (査読あり)

ジスク マシュー(2018.06)「日本語における漢字の意味借用」漢検漢字文化研究所東京講座「漢字研究最前線」, 於東洋文庫(招待講演)

Zisk, Matthew. 2018.05. Toward a Set of Glossing Rules and Abbreviations for Citing Kundoku Texts. Paper presented at the 118th Kuntengo Gakkai, Kyoto University, Japan. (査読あり)

Zisk, Matthew. 2018.03. What Do Kanji Represent: A Reevaluation of the Term 'Logogram'. Paper presented at the International Association of Japanese Studies 319th Meeting, Yamagata City, Japan. (招待講演)

Zisk, Matthew. 2017.09. Three Types of Semantic Influence from Chinese through Kundoku Glossing on the Japanese Language. Paper presented at the 14th International Conference on the History of the Linguistic Sciences, Université Sorbonne Nouvelle, Paris, France. (査読あり)

Zisk, Matthew. 2016.12. Sources Used in the Glossing of Classical Chinese Texts and Their Influence on Modern Japanese Orthography. Paper presented at Tapping Immaterial Resources: Glossing Practices between the Far East and the Latin West, c. 600 C.E., Goethe-University Frankfurt-am Main, Frankfurt, Germany. (査読あり)

Zisk, Matthew. 2016.12. The Origin and Development of Kun-yomi in Japan. Paper presented at the International Association of Japanese Studies 302nd Meeting, Yamagata City, Japan. (招待講演)

ジスク マシュー(2016.11)「言語借用の観点から見た訓点語における文法化の種類」第1回日本語と近隣言語における文法化ワークショップ(GJNL-1), 於東北大学

ジスク マシュー(2016.09)「和訓の選定プロセスから見た中古・中世のリテラシー史」日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画研究集会「新たな古典学としてのリテラシー史研究 多分野融合による可能性を求めて」, 於東北大学(招待講演)

Zisk, Matthew. 2016.10. Formation Principles and Diffusion of Chinese Loan Translations and Loan Derivations in Japanese. The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference, NINJAL, Tokyo, Japan. (査読あり)

〔図書〕(計1件)

Irwin, Mark & Zisk, Matthew. 2019. *Japanese Linguistics*. Tokyo: Asakura Shoten.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<https://yamagata-u.academia.edu/MatthewZisk>

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。